
ほおむれす

パンダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほおむれす

【Nコード】

N5114K

【作者名】

パンダ

【あらすじ】

俺、神田幸也は19歳にしてホームレスである。

隣にいる少女

目の前にうつるのは、公園で遊ぶ小学生達「出たな！怪獣！俺のこの伝説の剣で倒してやる！えいっ！やあっ！」

「ぐおおおお！やあらあれえたああああ！」

何も変哲もない子供の遊びだ。

誰もが一度はやったことのあるヒーローごっこというやつだ。

かれこれ何時間座っているだろうか、朝ジョギング中に顔を洗うオジサンを見てから昼には、主婦の方々の世間話も見た。

そして今小学生のヒーローごっこを見ている。

世間的にいう負け組だ。

仕事には、就かず家もない。

そう、ニートの上級クラスのホームレスというやつだ。

俺、かんたろうや神田幸也19歳の1日は、自動販売機を漁ることから始まる。

「よっしやあああああ！十円ゲットおおおおお！！今日はついているぞ！朝からうまい棒を食えるとは！」

周りの人達が振り向くが幸也は気にもとめない。

「お前またやってんのか？」

後ろから声が聞こえた。

「なんだ影史か」

「なんだとはなんだよ」

こいつは、やすもとかげふみ安元影文

俺の友達であり戦友であり悪友であり恋人である。

「ちょっと待って恋人はおかしいぞ」

間髪入れずにツッコミがきた。

「わかった訂正する」

こいつは、やすもとかげふみ安元影文

俺の友達であり戦友であり悪友でありいけない体の関係である。

「もっとおかしくなったな」

またしても間髪入れずにツツコミがきた。「そんな…私達ってそんなくらの関係だったの…」

「で、今日は何やってんだ」

聞いてないように影文が言った。

「日課さ日課」

「お前も大変だな」

「いや、そうでもないよむしろ楽しいくらいさ、ははは」

と幸也は、乾いた笑いをしながら言った

「そうか？ ならいいが」

じゃあ俺は仕事あるからまたな」

「お、またな」

そしてまた幸也は、自動販売機に目をやった。

影文と別れた後

俺は、コンビニへ一目散に走った。

コンビニに入ると他の物にもめもくれず

うまい棒が置いてあり棚へ向かった。

そして「友達の彼女を横取りして友達に全力で殴られたときの口の味」というやつを手にとった。

まだ10時もまわっていないだろう。

俺は、公園のベンチに座り

うまい棒の袋を開けた。

というやつを手にとった。

まだ10時もまわっていないだろう。

俺は、公園のベンチに座り

うまい棒の袋を開けた。

ぐるぎゅぎゅゆゆ

もの凄い音が鳴り響いた。

俺は、その音で手が止まり周りを見渡した。

「気のせいかな？」

そうしてうまい棒を袋から出した。

ぐるぎゅゅゅ

またしても音が鳴り響いた。

「まったくなんの音だ？」

俺は、後ろを振り向いた。

だが誰もいない。

「なんなんだよ」

そしてそのことに気になりながら

前を向いた。

「……」

手に持っていたうまい棒がない。

「あれ？俺もう食べたのかな？」

だが食べた覚えがない。

確かに後ろを見るまではうまい棒を持っていたはず、

だが、ない。

いくら見ようとなない。

目を擦ってもないものはない。

「そうか！下に落としたんだな！！」

しかし下にも落ちていない。

念の為靴の裏を見てみたが、見つからない。

諦めモードに入ったその時

隣からサクサクという音がした。

俺はゆっくり隣を見た。

そこには透き通るような白い肌、長い黒髪、パッチリした目、いわ

ゆる美少女が座っていた。

手には、うまい棒を握りしめて…。

迷子？

俺神田幸也はホームレスである。

毎日自動販売機を漁り、

そのお金で空腹を満たしてきた。

そして今日、今日の前に俺が買ったうまい棒を食べている少女がいる。

「あのお」

俺は、勇気を振り絞り少女に声をかけた。少女は振り向こうともせず、黙々とうまい棒を食べている。

その横顔に俺はそれに見とれていた。

そして30分がたった。

うまい棒一本を30分かけて完食した少女はこっちを向き

「なに？」

と言ってきた。

俺は、ハッと我にかえり

「それって俺のうまい棒だよね？」

と問いかけた。

少女は冷たい声で

「そう」

と言ってきた

「……」

ちょっと待てあのうまい棒は、やはり俺のだったのか、じゃあなぜこいつは、そのうまい棒を食べてる、あげた覚えなどない、むしろ盗られたと言っているくらいだ。

しかも平然とうまい棒を食べていたなぜ食べていたなぜどうしてだ。

「ねえ君なんで俺のうまい棒食べてるのかな？」

「お腹減ってたから」

「……」

なんで！お腹減ってたから？それで他人の物食べちゃいけないだろ。

「人の物盗ったらいけないって習わなかった？」

「習わなかった」

「そおかあ習わなかったかあ……っておかしいだろ！普通人の物盗ったらいけないだろ！」

「おかしいの？」

「おかしいもなにもダメなものはダメなんだよ！」

「初めて聞いた」

「初めて聞いたって！どんな親に育てられたんだよ！！」

「母親と父親」

「いやわかるよ！それはわかるよ！母親と父親に育てられたのはわかるよ！」

「なにがわからないの？」

「君がなぜ俺のうまい棒に食べてたのか！」

「お腹減ってたから」

「それは聞いたからわかる」

「そう」

「ああ、もういいやで君の親は？」

「君じゃない、椿、篠原椿」
しのはらつばき

「椿ね椿、じゃあ椿の親はどこにいるの？」

「日本」

「わかるよ！なに？椿ちゃんの親マダガスカル島にいるの！？」

「マダガスカル島じゃなくて日本」

「わかったわかったじゃあ日本のどこにいるの？」

「わからない」

「わからない？」

「うん」

「えーと、どういう意味？」

「どこにいるかわからない」

「それは、いわゆる迷子？」

「うん親が迷子」

「いやそれは椿が迷子ね」

「違う親が迷子」

「ああそう…」

「探さなくちゃ」

「うーん、よしわかった俺も手伝うよ」

「本当に？」

「うん本当に」

かくして迷子の親（実際は椿が迷子）を探すことになった幸也であった。

変化

俺と椿は、とりあえず歩いた。
心当たりはないか何度か聞いてみたけれど全てわからないで返ってきた。

「ちょっと休憩しようか」

「うん」

椿の年齢は見た目からして15、6くらいに見える無口であまり常識がないと思えた。「そういえばさ、椿って学校は？」

「行ってない」

「え？」

「行きたくなかったから」

「ああなるほど」

「……」

「……」

沈黙が15分ほど続いた。

「お、幸也じゃん、なにしてんの？」

馴染みのある声が後ろから聞こえてきた。俺が振り返るとそこには影文がいた。

「なんだ影文か、うーんと迷子を探してるかな」

「迷子？迷子って？」

「親だな」

「誰の親？」

「こいつの親だな」

「彼女の親か、なるほど彼女迷子か」

ふむふむと言った口調で影文が言う

「親が迷子」

椿が前を向いたまま言ってきた。

「え？ああうん親が迷子ね」

影文が笑いながら言った。

「そういうことだな」

「わかった、まあ頑張れよ」

「おう」

「じゃ、もうすぐ仕事始まるから行くな
えっと、彼女名前は？」

「椿だよ」

「お、じゃあね幸也、椿ちゃん」

影文がニコニコしながら手を振った。

俺は振り替えしたが、椿は無視をした。

「さてまた探しますか」

「……」

椿の反応がない。

「ん？」

幸也が横を向くと寝息をたてながら椿は、寝ていた。

「寝てるのか」

その寝顔は汚れをしろないどこかのお姫様に思えた。

俺はその寝顔に見とれてしまった。

俺が椿の寝顔に見とれて10分がたった。

「ん、ん」

「お、目覚ましたか」

俺が椿を見ながら言った。

するとこっちを向いて

「お兄ちゃんだあれ？」

と椿が笑顔で言ってきた。

俺は焦った。

今までの雰囲気全くない

さっきまでの椿じゃない

ニコニコしながらこっちを向いている

「椿だよな？」

「うん！」

椿はまたしてもニコニコしながら言ってきた。

「お兄ちゃんはだあれ？」

「え？ 俺か？ 俺は幸也だ」 所謂えばクールな方の椿に名前言っていなかった気がするななど思いながら、椿をよく見る、隅々まで見た。今まで面影全くない。

「お兄ちゃんいやらしいよ」

椿が半分照れたような口調で言ってきた。「ああ、すまん」

俺が謝ると椿がえへとか笑いながら顔を赤くしていた。

「で、お兄ちゃん私達何してるの？」

頭にハテナマークを浮かべ聞いてきた。

「なについてお前の親を探してるんだよ」

「へ？ 親？」

ますますハテナマークを頭に浮かべ言ってきた。

「お前の親迷子なんだろう？」

「なんのこと？ 私親いないよ？」

「いや今さっき親探してるって言ってたじゃん」

俺の頭が混乱し始めた。

「言っていないよ？ というか、お兄ちゃんと話したのも今が初めてだよ」

俺の頭がフル回転し始めた。

頭から煙が出るんじゃないかというくらい頭が回転した。

「え？ じゃあ今までの夢？」

だが夢にしては、リアル過ぎた。

うまい棒を食われたのは夢じゃないと思える。

「お兄ちゃん？」

「へほっ」

いきなり呼ばれて

わけのわからない声が出てしまった。

その返事で椿が笑っている。

その笑っている姿がもの凄く可愛かった。すると椿が大きなあくびをして俺によりかかってきた。

「ちょっ！おまっ！」

横を見ると気持ちよさそうに眠っていた。

我慢

いったい何時間たっただろう
もう日は沈みかけて

公園ではいつものように子どもが遊んでいる。

いつも通りの1日の終わりが近づいてきた。

ただ一つだけ違うところがある

隣に美少女が寝ているのだ。

やっぱりあれは夢だったのだろうか。

そんなことを考えながら椿の寝顔を見る。可愛いかなり可愛いもしも街中を歩いたらみんながみんな振り返るだろう、街を歩きたびにスカウトに声をかけられるだろう。このまま襲いたいという感情がうまれはじめた。

俺の頭の中で本能と理性が戦っている

「襲っちゃえよ！服を無理やり剥いで本能のおもくまま舌と舌を絡ませて感じさせてやれよ！そしてそのまま下へ下へ、胸をいじくりまわしやれよ！」本能が俺の耳元で囁く、すると理性が

「ダメよ！そんなんじゃないただの変態だわ！もっと堂々とやるべきよ！」

「ちょっと待て！なんで理性までもがそっちに持って行くんだおかしいだろ！」

なぜか本能と理性は同盟組んでいた。

そんな戦いが30分続いた。

結局勝敗はつかなかった。

ただの時間の無駄だった。

「なにやってんだ俺」

なんか悲しくなってきた自己嫌悪に陥っている時椿が目を覚ました。

「ああ、やっと起きたか椿」

「……」

無視である。

おかしい夢だったはずの椿に戻っている。「あれは夢じゃなかったのか？」

そう独り言を呟いた。

「ねえ」

「ん？なんだ？」

「お腹減った」

椿が言うとの同時に椿のお腹が鳴った。

「ああもうこんな時間か、そろそろ飯にするか」

俺はそう言うのと財布を開いた。

「！！」

金がないことをすっかり忘れていた。

「仕方ない影文に借りに行くか」そして俺達は、影文の家に足をのばした。公園からは影史の家まで15分くらいだ。その間も椿のお腹は鳴り続けていた。

家

目の前に家がある。

なんの変哲もない一軒家だ。

俺はそのチャイムを押した

ピンポン

「……………」

「はい、どちらさ…幸ちゃんじゃない久しぶり！」

「葵さん、久しぶりです」

でてきたのは影史の母親で安元葵^{やすもとあおい}である。

歳は34歳という若さで見た目は20歳くらいという化け物だ。

「葵さんじゃなくて、葵ちゃんって呼んでたっていでしょ」

葵さんが笑いながら言ってきた。

かなりの美人で街を歩くとよくナンパされるらしい。

「はあ、考えときます」

「葵ちゃんですよろしくね、で今日はなんのようかしら？影史ならいない…あら、可愛い娘連れてるわね、彼女？」

「彼女じゃないです！！」

「あらそう、残念ね」

葵さんが本当に残念そうに言ってきた。

「残念そうにしないでください、というか影史いないんですか」

俺はため息をつきながら言った。

「でももう少ししたら帰ってくるわよ、中で待ってとく？」

「じゃああがらしてもらいます」

「あがってあがって」

葵さんが嬉しそうに言った。

そして家にあがった。

「おじゃまします」

「……」

椿はなにも言わずあがった

横では葵さんがニヤニヤと笑っている。

「なにかしでかすきだこの人」

「ん？ なにか言った？」

「いえ、なんでもないです」

俺達はソファーに座りテレビを見ている。特にみたいのはなかった
ので椿にチャンネルを渡すとチャンネルをどんどん変えていき「
sex y温泉巡り！ポロリ旅」というところでピタッと止まった。

「ゴールデンで流しているのかこれ」

俺はそう言って椿を見ると軽く目が輝いている…ような気がした。
すると葵さんが立ち上がり

「お腹空いてない？ なんでもいいなら作るわよ」

と聞いてきた。と同時に椿の顔が葵さんの方を向きコクンと頷いた。

「幸ちゃんは？」

「あ、お願いします」

ここは甘えさせてもらおう。

「おっけえ」

そういうと葵さんはキッチンへ向かった。俺と椿はまたテレビを見
始めた。

テレビは今ちようど入浴タイムで女の人が入っていた。そしてその
女の人が温泉から上がろうとした時、タオルがほどけた。と同時に
カメラは違うところを向いた。

「…おいしい」

俺はボソツと呟いた。

すると葵さんが

「幸ちゃん、百合を起こしてきてくれない？」

「あ、はい」

百合とは安元百合やすもとゆりそう影史の妹だ。中2で俺にとっても妹みたいな

ものだ。

俺は階段を上がり百合の寝ている部屋へ向かった。

妹

ガチャッ

俺は百合の部屋の扉を開けた。

百合の部屋はいかにも女の子みたいな部屋でぬいぐるみがかなりある、作りかけのぬいぐるみもある、そしてバラバラになったぬいぐるみもある、作った後気に入らないでバラバラにしたのであろう、グロテスクだ。

「そういえば百合に合うの久しぶりだな」俺は百合のベッドに近づき、寝ている百合を起こした。

もの凄い蹴りがとんできた。

「ゲッフ！」

俺は宙に舞いそして床に転がった。

百合はもの凄く寝相が悪く、昔一緒に寝た時なんか逝きそうになったことがある、「痛てっ、久しぶりだから忘れてた」俺は立ち上がり次は慎重に百合を揺さぶった。

シュッ

「あまい！！もうお前の蹴りなんぞ当たらんわ！！」
勝ち誇りながら言っていると、

ゴン

鈍い音がした。

百合が投げた目覚まし時計に当たったのだ俺はそのまま気を失った。

「……ちゃん」

「…兄ちゃん」

「幸兄ちゃん!!」

目を開けると目の前に百合が座っていた。「ん、百合かおはよう」

「おはようじゃない!なんでこんな所に寝てるの!?風邪ひくよ?」

「それは…」

「それは?」

「いやなんでもない」

言わないでおこう、百合は自分がもの凄い寝相が悪いことを知らない、知ったら多分泣くだろう。

「まあいつか、というかなんで幸兄ちゃんいるの?」

「遊びにきたからかな」

「じゃあなんで私の部屋に…はっ!まさか私を食べに来たんじゃ」

「断じて違うぞ」

俺は冷静に言った。

「ぶ」

百合が不満そうに顔を膨らませた。

「じゃあなんで私の部屋に?」

「ああ、葵さんから起こして来てって言われてな」

「ご飯かな?じゃあ食べに行こう幸兄ちゃん!」

百合は笑いながら言った。

「お、おお」

不覚にもドキッとしてしまった。

俺達は飯を食べに一階に降りて行った。

「やっと降りてきたわね、大変だったでしょう」

葵さんがニヤニヤしながら言った。

「ええ、まあ、不覚にも気絶しました」

葵さんはそれを聞くと笑い始めた。

百合は頭にハテナマークを浮かべていた。「そういえば、椿はどこに行ったんですか？」

「椿ちゃんは、お風呂に入れたわ」

「ああ、風呂ですか」

「ほほう、幸ちゃん椿ちゃんの裸に興味があるのかい？」

葵さんがからかうように言ってきた。

「ち、違います！」

「まあ、幸ちゃん男だからしょうがないかあ」

「だから！ 違」

「さあてもうそろそろご飯出来上がるわよ」

葵さんが俺の言葉を遮るように言った。

「ご飯♪ご飯♪」

百合は嬉しそうにはしゃいでいる。
すると

ガチャッ

リビングの扉が開いた。

食事

そこには、バスタオル一枚の椿がたっていた。

「ちょ、お前！な、なんでタオル一枚なんだ！」

俺は鼻から溢れ出るものをふさぎ言った。「ここはどこだ？」

「へ？」

また椿の様子がおかしい

今度の椿は目つきがするどく、堂々とした気迫がある。

「ここはどこだと聞いている」

「どこって影史の家だけど」

「ふむ、なるほど、にしてもおいしそうな匂いがするな」

そういうと椿は机の方に向かい机に置いてある唐揚げを食べ始めた。

葵さんはわけがわからないというふうに困っている、そして百合は誰みたくない目で見ている、俺はというと：

ベシッ

「お前！勝手に食うな！」

椿の頭を叩いた。

「んっ！なにをする！」

「勝手に食うなって言ってるんだ」

「それはすまぬあまりにおいしそうだったもので」

そんなやりとりをしていると

「ねえ幸兄ちゃんこの人誰？」

と百合が聞いてきた。

「彼女よ彼女よ幸ちゃんの彼女よ」

葵さんがニコニコしながら言った。

「違います！」

俺は光にも負けない早さで否定をした。

「にしてもあれよね、なんか今さっきまでの性格と全然違うじゃない？」
葵さんは椿をちらちら見ながら言ってきた。

「なんか椿は、なにかの拍子で性格が変わるみたいなんです。ここにくる前もいきなりお兄ちゃんとか言ってきた」

「ふーん、なるほど多重人格ね」

「やっぱりそうなんですかねえ」

「多分そうだわ、初めて見るからわからないけど」

俺と葵さんが考えていると

「ところでお主達は誰なのだ？」椿が唐揚げを食べながら聞いてきた。

「私百合っていうの！」

百合が目キラキラさせながら言った。
それに続いて

「私は葵よ、葵ちゃんって呼んでね」

「俺は幸也だ」

「ふむ、百合と葵ちゃんと幸也だな」

唐揚げを食べながら椿が言った。

「葵ちゃんの唐揚げおいしいな」

「あらやだお世辞上手いんだから」

ベシッ

葵さんが照れながらなぜか俺の背中を叩いてきた。もの凄い威力だ
多分背中に綺麗な紅葉マークがついているだろう。

「葵さん痛いです」

「葵ちゃんでしょ」

バシッ

またしても背中を叩かれた。

次のやつは今さっきのとレベルが違い

前に倒れそうになってしまった。

「だから痛いです」

「痛くしてるからね」

葵さんが可愛く言ってきたが、可愛いレベルを通り過ぎて怖かった。
すると

「おかわり」

椿の声が聞こえた。

皿を見ると4人前の唐揚げが無くなっていた。

「お前食い過ぎだ!!」

「そうなのか？まだ全然大丈夫だぞ」

こいつの胃袋は、四次元なのか

俺は呆れながらはあとため息をついた。

葵さんかというと「待っててね」と言ってまたキッチンに向かっていった。

一方百合は、姉ができたのが嬉しいのか椿を見たり見なかったりしていた。

椿はまだかまだかと言わんばかりに目をキラキラさせながら椅子に座っている。

俺は

「影史早く帰ってきてくれ」

と小さく呟いた。

予想外

あれから一時間くらいたった。

椿はやっと食べ終わり今はソファアの上で寝ている。

「嵐のようだったわ」

葵さんが笑いながら言ってる。

「すみません、冷蔵庫の中の無くして」

「いいのよ、いいの、楽しかったし」

「でも影史の分が…」

「あんな糞息子なんてご飯と梅干しでじゅうぶんよ」

「はぁ、そうですか？」

「うん、うん」

俺達は、椿が食べなかった分のご飯を食べている。

「幸兄ちゃん」

百合が呼んできた

「ん？なんだ？」

「最近うちに来なかったけどなにしてたの？」

「えっ？あぁ、うんまぁいろいろだ」

今ホームレスなんて言えない。

言ったら間違いなくずっと泊まってみたいな事を言われる。さすがにそこまで甘えさせてもらえる勇氣は幸也は持ってない。

「ふーん」

百合は興味なさそうにまたご飯を食べ始めた。

「そういえば影史遅いですね？」

「うーん、そうだねえ、いつもだったら帰ってきてるんだけどなあ」
確かに遅かった、もう10時になりそうだ。すると

葵さんの携帯から着信音が流れはじめた。「誰からかな？」

葵さんの携帯には、よく仕事で電話がかかってくる。まあ半分は葵さんをねらってる男からだが。

葵さんが携帯を開くと『糞息子』と映っているそう影史からかかってきたのだ。

「あの糞息子が！」

葵さんは怒り気味に電話にでた。

一分後

「ああ、うんわかったわかった」

葵さんは呆れながら電話を切った。

「どうしたんですか？」

「あの糞息子、今日帰ってこれないだって」葵さんは、はあとため息をついた。

「そうですか、じゃあ俺達は、帰ったほうがいいですね」

「いいよ、いいよせっかくだから泊まっていきなよ」

「いやでも、迷惑だし」

「迷惑じゃないよ、息子みたいなもんだしそれにほら」葵さんは百合を指差した。

「幸兄ちゃんがお泊まりだお泊まりだ」

とか言っではしゃいでいる。

「たがら泊まっていきなよ」

「ああ、じゃあ甘えさせてもらいます」

「よし、じゃあ寝るところはどうしようか？」「幸兄ちゃんと寝る！！」

百合が嬉しそうに言ってきた。

「とか言ってるけどどうする？別に影史帰ってこないから影史の部屋でもいいけど？」

「どうしまょうか？」

俺は考えた。

隣では、百合が「幸兄ちゃんと寝る寝る！」とか言ってただをこねている。

俺は考えている。もし影史の部屋にいと百合がわめきだす、しか

し百合ももう中学生だ、でるところではじめている。百合と寝ると必ず抱きついてくる。

そんなことを考えていると

「百合の部屋にけつてえ！」

いつの間にか葵さんと百合で勝手決まっていた。

「じゃあ、百合の部屋ね幸ちゃん」

「いやでも、百合ももう中学生だし」

「百合なら、大丈夫幸兄ちゃんにならどんなことをされてもいいから」

百合がそんなことを言いながらスカートをちらちらさせていた。とんだマセガキだ。「もういいじゃん幸ちゃん、百合の部屋に決定ね」

「いやでも…」

「百合の部屋ね」

葵さんがニコニコしながら言ってきた。

怖いなんか怖いしかたなく承諾した。

「よし決定、じゃあ幸ちゃんお風呂に入っておいで沸かしてあるから」

「はい、じゃあお先にいただきます」

俺はため息をつきながら風呂場に向かった。

お風呂

ガチャ

俺は風呂場のドアを開き

「なんか今日は一段と疲れたな」

そんな独り言を言いながら脱ぎはじめた。脱ぎ終わると風呂へ行っ
た。

俺は最初頭を洗う主義だ。

シャンプーを手に取り頭をシャワーで濡らし洗い始めた。

シャンプーを流し終わると次は体を洗い風呂の中に入った。すると

ぎぎいいい

扉の開く音が聞こえてきた。

「入ってまあす」

そう一言言ったが返事がない。

「あれ？気のせいかな？」

疑問に思いつつまたゆったりとし始めた。「幸兄ちゃん！一緒に入
ろー！！」

かなりでかい声が風呂場に響いた。

「ちょー！百合！なんでお前が！」

百合がバスタオル一枚で立っている。

「あらあら慌てちゃって、もしかして興奮した？」

百合がおちよくるように言ってきた。

「するわけないだろ！」

「本当かなあ？」

「お前のお子様な体を見たら逆に萎えるよ」

「お子様じゃないもん！」

百合が怒鳴る。

「はいはい、じゃ百合が入るなら俺あがるかな」

「ダメだよ！百合は幸兄ちゃんと洗いっこをするために今日二回目のお風呂に入りきたんだよ！」

「一回入ったなら入らなくていいだろ」

「幸兄ちゃんと入りたいの！」

「お前中学生だろ」

「うん中学生だけど、そんなの関係ないもんねえ」

百合が浴槽に入ってきた。

百合の小ぶりの胸が見えそうになる

「なんで入ってくんだよ」

「いいじゃないかいじゃないか」

俺はあがろうとするが百合にがっちり腕をつかまれてあがれない

「俺はもう温まったからあがるから腕を放してくれ」

「洗いっこするの」

ただをこねる百合

「俺は洗ったからいい」

「百合は洗ってない」

「洗えばいいじゃないか」

「幸兄ちゃんに洗ってもらう」

「自分で洗え」

「いや」

「俺はあがる」

「ダメ」

ダメだこいつ俺が洗わないと腕を放さない。

「仕方ない洗ってやるから、そこに座れ」「やったー！！」

百合は嬉しそうに湯船をあがった。

俺はシャンプーを手にとり百合の髪をシャワーで濡らし、髪を洗いはじめた。百合はニコニコしながら鼻歌を歌っている。まだ腕は放さない。

「百合、洗ったら俺はあがるぞ」

「ダメ、百合も幸兄ちゃんの体洗ってあげる」

「いやもう洗ったから」

「……」

反応がない聞いてないようだ。

俺は仕方なく洗うのを続行した。

髪を洗い終わり次は体だが、さすがにダメだと思う、百合はもう中学生だ、体のラインははっきりして、胸もではじめている。「体は自分で洗えよ」

「えええ、幸兄ちゃん洗ってよ」

「いや、さすがにそれは」

「何？もしかして百合に興奮しちゃった？」

「そんなわけないだろ！」

「ふーん、ならこれならどうだ！」

百合がいきなり飛びついてきた。

しかもその勢いで百合が巻いていたタオルが外れていた。

胸の食感がじかに伝わってくる

「ちょ！おま！！」

「えへへ、抱きついたちゃった」百合はタオルが外れたことに気づいていないようだ。

「百合…タオル」

「へ？」

百合が恐る恐る下を向いた。

「きゃあああああああ！！」

「ゲフツ」

平手がとんできた。

「幸兄ちゃんのえっち！！！！」

百合はすぐさま風呂場から出て行った。

俺のせいなのか？などと思いつつ俺は風呂を出た。

不機嫌

俺は風呂を上がりリビングへ向かった。
なにやらリビングが騒がしい

「葵さん、どうしたんですか？」

俺は扉を開けながら言った。

「あ！ダメ！」

「へ？」

俺は目を疑った。

椿が裸で立っていた。

「わ！すまん！！」

俺は急いで廊下に出ようとした。
するとゲーム機が光速でとんできた。

「幸兄ちゃんのえっちいいい！！！！」
なぜに百合が怒る！

「椿お姉ちゃん早く服来て！！」

「……うん」

百合が慌てている。

俺は廊下で鼻を抑えながら待った。

「幸ちゃん、椿ちゃんの着替え終わったよ」

「あ、はい」

さっきの光景が目には焼き付いている。
ドキドキしながらリビングへ戻った。

「にしても幸ちゃんが覗きが趣味とは知らなかったよ」
葵さんがニヤニヤしながら言ってくる

「そんな趣味はありません！！」

「いいのよ隠さなくて」

俺はまた否定しようとしたが無駄だと思ってやめた。

「と、ところで一体なにがあっただんですか？」

「ああそれはわね、いきなり椿ちゃんが私も幸也とお風呂入るとか言って脱ぎだしたのよ」

「え？ 本当ですか？」

俺は軽く焦った。

「嘘よ」

「そうですよねえ」

「椿お姉ちゃんと一緒に入りたかったんだ」

百合はじーっとこちらを見てくる。

「ちげえよ！」

「ふーん、じゃあ眠たいから先寝るね」

「「おやすみ」」

俺と葵さんが言った。

百合はなにも言わず、部屋に戻った。

「……」

一時沈黙

「百合怒ってませんでした？」

「私も久しぶりに百合が不機嫌なの見たわね」

「なんか悪いことしたかな？」

俺は一言呟く、葵さんはお皿を洗いにキッチンへ向かった。椿はまた寝ている。

「ただ寝ればすむんだよこいつ」

部屋

俺は神田幸也普通のホームレスだ。

まあホームレス自体が普通じゃないわけだど今はそんなことどうでもいい。

今はこの状況をどうにかするべきだ。

今俺は寝るために部屋にきたわけだが

おかしい、確かにここは自分の部屋じゃないだからおかしいと思うはずだがそんなことじゃない、異様に毛布が膨れている。

「影文が帰ってきたわけじゃないよな？」影文とは俺と幼なじみである

そして今いる部屋は影文の部屋である

だが影文は今日帰ってこないと言っていた…はず。

俺はベッドに行き毛布をめくった。

「！！」

なぜこいつが

なんでこいつが俺が寝ようとしているベッドにいるんだ。

今まで散々寝ていたやつがいまいる。

そう椿だ。

「な、なぜこいつが、今まで寝ていた、しかも俺が二階にあがる時もソファ―で寝ていたやつがなぜ」

その時椿が起きた。

「…おはよ」

目を擦りながら言ってきた。

「ああ、おはよ」

ちなみに今は夜だ、深夜だ。

「って！！違う今はこんばんはだ！…いやそんなことはどうでもいい、なんで椿が俺の寝る布団にいるんだ？」

「一瞬に寝るから」

おかしいこいつの頭はおかしい

今日合ったばかりしかも別にそんなに話したわけでもない親しいというわけでもない「よしわかった、とりあえず百合の部屋に行け」

「……」

華麗にスルーされた

ひとときの沈黙

「聞いてるか？」

俺はそう言って椿の顔を見た

「寝てやがる」椿器用に座ったまま寝ていた。

「仕方ないか、一階のソファで寝るかな」

俺はため息をつきながら一階に降りた。

「久しぶりにベッドで寝たかった」

そんな独り言が階段に響いた

膝枕

寝れない眠いのに寝れない。

ソファーは軽い睡眠にはもってこいだが。深い睡眠の時は最悪だ。俺は寝れないためにテレビをつけることにした。

今は深夜3時、今ある番組はNHKかエロ番組くらいだ。

「暇だな」

俺はNHKを見始めた。最初はエロ番組を見ようとしたがさすがに人の家で見える気はない。

今あってる番組はよくわからない通販だった。

俺はテレビをつけたまま目を閉じた。

ガチャ

ふいにその音で目が覚めた。

俺は立ち上がり時計を見た。

4時を指していた。

「軽く寝ちまったみたいだな」

俺はあくびをしながらまた寝るため体を寝かした。

ムニユ

「ムニユ？」

後頭部に柔らかい感触をした。

なんかいい匂いがする。

手をその柔らかい感触の方へ伸ばした。

「…んあっ」

柔らかい過ぎず固すぎず手にフィットするような球体が手の中にある。

「あ…んあっ」

湿った声が消える

俺は声ができる方へ顔を向けた。

「なっ！！」

そこには顔を赤く染めた椿が俺に膝枕をしていた。

俺はすぐに飛び起きて、机の角で脛を打ちその勢いでこけた。

「痛た…、つかなんでいるんだよ！！」

俺は顔を赤く染め脛を抱えていった。

まだ手には柔らかい感触が残っていた。

「…起きたから」

椿の顔はまだ赤く染まっていた。

「それはわかるがなんで俺に膝枕をしてるんだ？」

「…なんとなく」

その時には、もう椿の顔は赤くなかった。「ああうんわかったから

早く寝ろ」

「…やだ、眠くない」

「やだって…」

俺も胸を…いや脛を強打したせいで眠気がとんでいた。

「まあ仕方ないかあんだけ寝てりゃ」

俺はため息混じりに言った。

「…幸也」

「ん？なんだ？」

「暇」

「そうだな、じゃあ散歩に行くか」

「…うん」

その時椿が笑った…ような気がした。

散歩

俺と椿は外へ出た。

時間は4時半、まだ薄暗い時だ。

なにも目的は無く、ただただ歩いた。

4時半という時間なため、車はあまり通ってなく静かだった。

「さて、どこいこうか」

俺は独り言のように自然に椿へ質問した。

「………」

無言

「今から、どうしようか」

同じような内容でまた自然に質問した。

「………」

またも無言

流石に三回目を聞くのは恥ずかしくなり、聞けなかった。

だいぶ歩いてきた。

日が上がりはじめ、1日の始まりがくるのを知らせた。

ただ、散歩に出てから一回も会話をしていない。

流石に気まずいと思いまた聞いた

「どうす…」

「…あれ」

俺の言葉を遮るように、椿は指をある物に指した。

「あれって、あれか？」

「うん…、あれ」

俺は椿が指を指していたある物に指を指した。

「あれか…」

俺は不安に呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5114k/>

ほおむれす

2010年10月12日06時55分発行